

# 離島の商品・資本移動(一)——島嶼時代

## 河地貫一

離島における商品、資本交流に関する法則的パターンとその歴史性——問題提起に代えて

島嶼時代(問題提起、砂糖群島、奴隸諸島、香料群島)

日本の島嶼時代(沿岸寄港島、漁業島ことに西海捕鯨島)

離島における商品・資本の交流に関する法則的パターンとその歴史性——問題提起に代えて

離島における財貨の移出入 (昭和35年)

地域別 品目別	佐渡島(新潟)		対馬島	
	移出	移入	移出	移入
農・林・畜産物	46.3%	11.6%	21.2%	44.5%
水産物	16.3%	5.2%	53.3%	—
鉱産物	1.6%	0.7%	25.5%	4.4%
工業製品	—	32.9%	—	23.3%
一般食品及雑貨	25.9%	31.7%	—	24.4%
その他	9.9%	17.9%	—	3.4%
総計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
金額総計	百万円 4,861.8	百万円 5,425.8	百万円 2,469.2	百万円 2,332.8

(昭和37年度編：離島振興計画作成基礎調査書・佐渡編、対馬編による。)

(註) 対馬農林畜産物移入は主として米穀類、移出は林産物である。対馬鉱産物移出は主として、鉛、亜鉛の原鉱石である。移入鉱産物には両島とも石材、砂利が、工業製品にはセメントが重量ではかなりのウェイトを占めている。

世界経済の時代において、完全な自給世界はあり得ない。リウは、世界で最も孤立した島としてあげられているフィジー諸島近くのフツナ Futuna 島やワリス Wallis 島(1)においても、商品作物として椰子を栽培し、また南太平洋のトリスタンダクレーナ Tristan da Cunha 島でも、寄港船との物々交換をあげている。また世界経済期以前の(4)一五世紀頃、ヴァイベルによる(5)、大西洋アフリカ沿岸にあるサン

・トーマ San Thome、マデイラ Madeira、カナリー Canaries の島々において、既に古典的な甘蔗の栽植農業が始められ、(6)ついでヨーロッパの商業資本が、西インドの諸島に対して盛んに植民地開発を行い、これらの島々の世界経済への参加を用意している。

わが国の沿岸島嶼も多くは米の自給が不可能であり、また少くとも近世以降船舶の寄港地となった島々は、単に人口の交流を介してばかりではなく、商品、貨幣の交流を介しても、他の地域との交流のあったことは明かである。

今日のわが国離島の商品の交易構造をみると、主として水産物、原料品(木材、鉱石など)の移出、建設資材、工場製品の移入という、いわば植民地的な交易のパターンが一般的である。

資金、資本の交流では、例えば高島(炭鉱島、三菱資本)、

金融機関預貸率

	宍 岐 1)			対 馬 2)		
	地元銀行	農 協	漁 協	地元銀行	農 協	漁 協
昭和36.3	40.9%	63.3%	214.5%	48.5%	45.2%	179.0%
37.3	37.7	65.6	126.4	48.7	59.2	150.0
38.3	38.1	66.1	120.3	47.2	57.1	125.0

1) 河本博介：宍岐の金融の現況と問題点(宍岐の経済—1964)

2) 都野尚典：対馬の財政と金融(対馬の経済と社会—1965)

少くとも現在離島振興法に指定されているわが国離島の貨幣流通は、産業流通、金融流通では島際収支は赤字であり、財政流通に関しては、むしろ、一方的な受取超過にあるといえる。

離島の商品・資本移動(一)島嶼時代

契島(東那垂鉛資本)、因ノ島(日立造船資本)などにおける民間資本投下の例もあるが一般的には、離島の地元民間銀行の予貸率はひくく、また島民の郵便貯金、損保掛金、株式投資などは資本の論理に従って本土の近代資本の充填する地域に一方的に流出する。都野の推計によると、対馬のばあい、金融流通では約二億円の流出超過である。これに対して、主として離島振興法その他による公共資本が離島内における財政吸い上げを超えて一方的に離島に投下され、対馬では約七億円の受取超過になる<sup>7)</sup>。その他、制度金融の資金や、島外出稼者送金の貨幣流入がある。

また離島は商品の交易からみると、重量、価格ともに移入超過が多く、産業流通では貨幣は島外に流出している。宍岐では、実に移入価格が移出のその二倍をこえ、東那垂鉛対州鉱業所の立地する対馬でようやく相均衡している。

主要離島移出入金額 (百万円)

	移出金額	移入金額
	百万円	百万円
宍 岐 島	909.6	1,814.5
対 馬 島	2,469.2	2,332.8
五 島 列 島	6,629.9	7,229.1
平 戸 諸 島	782.9	1,028.2
生 月 島	2,709.2	914.3
佐 渡 島	4,861.8	5,425.8
隠 岐 島	2,108.1	3,894.7

各関係島「離島振興計画作成基礎調査書」より。

離島振興法による財政投資（長崎県、広島県）

（長崎県昭和28～37年、広島県33～38年）

（単位百万円）

地域名	事業費	国費	県費	市町村費	その他	面積 (km <sup>2</sup> )	人口 (人)
長崎県	10,125.9	6,463.2	1,353.7	1,113.4	1,175.6	1,826	452,619
広島県	954.3	530.3	424.0			272	112,370

経営と経済

主要離島の対岸主要港依存率（昭和39年）—重量—

	移出	移入	対岸主要港湾
	%	%	
両津	95.4	96.8	新潟
西郷 1)	17.9	94.7	松江、境、世来
御手洗 2)	98.5	78.6	広島、愛媛諸港
郷ノ浦 3)	49.1	82.7	博多、唐津
厳原 4)	16.7(19.7)	58.1(61.5)	博多
福江 5)	18.4(51.2)	32.8(46.7)	長崎
西之表	100.0	100.0	鹿児島港
平戸 6)	63.3	35.6	佐世保、田平

（昭和39年全重量に対する%、但し平戸は昭和37年度）

註、1) 西郷の移出率のひくいのは原木の工場直送が極めて多いから。2) 木材の宮崎から直移入が21.4%ある。3) 移出が比較的少いのは、原料品（木材、土石）の産地直送が多いから。4) 鉾石の工場直送が極めて多い。北九州市を加えると、移出は40%、移入は64%になる。  
（ ）は明かに島内の中継的機能と思われる数字を除外したもの。5) 福江も同様、福江の中継的機能は極めて大きい。移入では建設財（土石）が産地直送。6) 平戸も唐津からの土石の移入が大きい。

（日本国港湾統計年鑑昭和39年度）

庁、その他国の出先機関の集中地点）郷ノ浦（同唐岐支庁その他）、厳原（同対馬支庁その他）と島内（列島内）の各地点とは同じく当然密接な関係が生じる。かかる関係は人の移動にもあらわれる。まさに人の移動の時に述べた例えば経済的にはむしろ福岡の圏内に属する唐岐島の郷ノ浦と長崎市との関係が「出張」という旅行目的を介して最も多く指摘されたの

かかる資本、資金、こ  
とに財政資金との交流は、  
戦後なお財政的に中央集  
権的性格の強いわが国で  
は県および町村財政を中  
央の政策にまきこみ、<sup>(8)</sup>  
かかる投資を媒介として、  
受け入れる離島と、国、  
県の政庁所在地との関係  
は極めて密切になり、ま  
た離島内でも本土の出先  
官公庁機関の立地する特  
定地点——例えば五島列  
島福江市（長崎県五島支

海上貨物品種別港別表

一 昭和39年度港湾統計年報による 一

日立造船因ノ島工場  
鋼材移入状況  
(昭和40.7~9)

離島の商品・資本移動(一) 島嶼時代

	岐 原		福 江	
	移 出	移 入	移 出	移 入
米及その 他食品	2,986	276	6,574 (米) 8,180 (その他食品)	11,686
水産物	28	1,492	—	409
林産物	733	90	18,831	9,104
鉱産物	1,180	—	7,173	1,494
工業製品	8,062	1,958	23,943	26,205
その他	3,170	653	1,478	2,180
計	16,159	4,469	66,179	63,504

総トン	44,125トン
鋼板	
八幡	45.4%
広畑	11.9
千葉	18.1
尼崎	4.2
大坂	0.8
堺	3.3
豊橋	3.6
川崎	1.4
不定	2.2
鋼管	
川崎	1.4
光	0.6
阪神	0.9
メーカー	
条鋼	
八幡	4.6
大坂	1.7

ともに、米、工業製品の中継港的性格は明かである。  
対馬は、陸上交通が未整備なために、この傾向は、一  
島でありながらなお強い。

(日立造船提供)

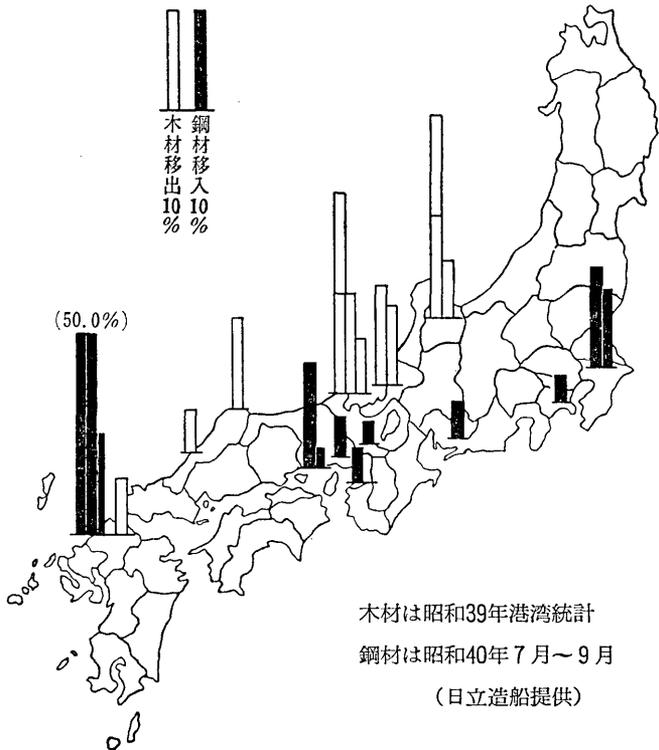
はこの理由であろう。  
次に離島における商品交易の相手地域をみると、一般的にいえることは、本土対岸にある主要港湾（必ずしも生産地ではない）との交易が中心である。兩津港（佐渡島）の対新潟港、西之表（種子島）港の対鹿児島港、などその典型的な例である。しかし、一般にいわれる運搬能性のひくい商品や重量の大きい機械製品は直接消費地、或は生産地と結合する傾向がある。隠岐島の木材が直接日本海沿岸の製紙工場に送られ、石材、砂利などの建設資財は生産地から離島に直送される。対州鉱業所の鉱石は契島、安中に直送され、因ノ島造船所で消費される鋼材は生産地から直送されてくる。  
島内（或は列島内）の商品移動をみると、人の移動にもみられたように、島内（列島内）に中継港の機能をもつ中心地点があり、

同一島内においても中心地对非中心地、同列島内における中心島対非中心島との商品交流をかなり指摘しうることは、さきの研究や竹内のそれから<sup>(9)</sup>も推定される。対馬は一島であるが、陸上交通の発達がおくれて、島内商品移動もかなり港湾統計にあらわれ、畿原は中継的的性格が強く、福江もまた下五島に対して同じ性格が強い。

以上、商品、資本の移動からみても、人に移動の考察において指摘したように、現在本土および島内（列島内）の中心地点と離島との交流は極めて密切であるが、他の非中心地点や離島とは孤立的であるという、法的なパターン

西郷（隠岐島）木材移出相手地（総45,267トン）

日立造船鋼材移入相手地（総44,125トン）



鋼材は主として、太平洋ベルトの工業地帯、ことに瀬戸内の東西両端の北九州、阪神工業地帯の工場から直送（50%は八幡製鉄）され、木材（隠岐島）は日本海沿岸の製紙パルプ工場に直送される。

が指摘される。

しかしながら、藩政の後期には、西海の捕鯨資本が西海の島々を移動し、藩もまたこれが保護に多額の投資を行っている。また小値賀島の捕鯨資本が他の島である平戸島や針尾島に新田開発のために投下されている。また今日の離島振興法等による大きい公共資本の投下は、例えば対馬に投ぜられた軍事投資を除いては戦前は極めてまれであったから、その点からいえば、国、県の政庁新在地と離島とは戦前必ずしも密接な関係にあったとはいえないであろう。

商品の移動にしても、藩政の後期に西回り航路にそう御手洗港が「寄港地から市場に発展し」、各地の商品の移出入があったのが、現在では対岸の主要港および附近諸島との交易に限られ、長崎県の平戸にもほぼ相似た変遷がある。また対馬の厳原港が藩政期に国際的な自由貿易港の性格をもつて、長崎、江戸、大阪、朝鮮との中継貿易を行っていたのが戦前の自由主義の段階では博多、長崎に、独占段階に入ると戦前では博多、下関に交易相手地域が限定されてしまった。しかし戦後東邦亜鉛対州鋳業所の立地その他の大きい変貌につれて、かなり日本国内に広い交易の相手地域をもつに至っている。また、藩政期の干し鯛の好況期には、今日極めて孤立的な甕島（鹿児島県）において、肥前、肥後および大阪方面との直接の取引があった。その頃平良に港灣が構築されている。

かくして、さきに述べた商品、資本の交易に関する法的パターンは実は歴史的な現実であり、従って、資本、商品の交易を媒介とする離島と他地域との交流は、歴史的な考察を必要とすることになる。

## 島嶼時代

### 問題提起

一七、八世紀は東インドの香料貿易をヨーロッパ商人が独占し、そこに植民地支配を進め、また特に一八世紀は、ヨーロッパ商業資本が西インドに投資し奴隷労働力を送って砂糖生産と貿易とを独占した時代でもあった。

近代的な植民は最初にまず島が撰ばれた。<sup>19</sup>そして当時の世界商品は香料と砂糖と奴隸であり、その生産地は熱帯の島々（奴隸はアフリカ沿岸の島々から輸出）であった。まさに一八世紀はリウのいう「島嶼時代」<sup>19</sup>であり、一七世紀を「香料時代」とするならば一八世紀は「砂糖時代」<sup>20</sup>であり「奴隸時代」であった。

島はまた戦略上の目的から、例えば本土防衛のために本土側から要塞島化された例は多い。例えば、一九世紀初までフランス沿岸には要塞島が多く残存しているし、また一方では大陸内部侵略のための最初の根拠地としてその沿岸の島が外部侵略者によって支配された例が多い。外部の商業資本が暗黒大陸アフリカ内陸侵略のための根拠地として、近づきやすく、かつ防衛に容易なその沿岸の島々に投資された。同時に本土の物資の集散地となり、そこにリウのいう「島市」<sup>23</sup>が開かれた多くの例がある。後になって開かれたアジアのボンベイ、ペナン、ホンコン、シンガポールなどもこの例に入ろう。

大陸沿岸のみでなく大洋中に散布し、それ自体極めて限られた価値しかない孤島（従来無人島であったものもある）<sup>24</sup>でも、世界航路が開かれて、ラツツエル流に言えば、その「自由なる位置」<sup>25</sup>によって、航海者、或は漁業者の寄港地として投資され、利用されてきた例は多い。

わが国の藩政期は特定の地域を除いては本来自給的であり従って孤立的であったが、本土農山村と異って、今日極めて孤立的であるといわれる島々は、むしろ島であるが為にかなりの例外があったと思われる。すなわち、わが国の沿岸の島嶼は、藩政の中期以降急速に発達した沿岸航路の寄港地に多くえらばれて、明治初期までの紀二世紀の間、島なるが故に、かえって本土農山村よりも栄え、他地域との交流が多かった。この十八世紀から一九世紀後半の時期を、わが国の「島嶼時代」とすることが出来よう。また九州西海の島々のように、捕鯨基地として、藩政後期最大の企業である捕鯨業の立地したのもあった。<sup>27</sup>かかる例外的なものでなくても、元来島は多くのばあい主穀の自給が困

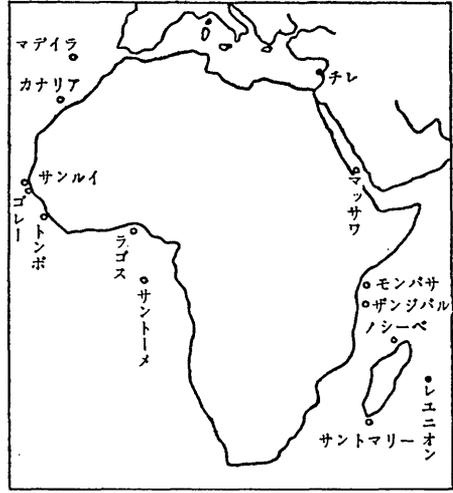
難で、その交易を介して他地域との交流が早くから行われている対馬のような例は多い。一般的にいつて、少くとも藩政期は本土農山村より島が、より孤立的であったとはいえないであろう。

**砂糖群島** 熱帯栽植農業の研究にかがやかしい業績を残したヴァイベル Leo Waibel によると、栽植農業は甘蔗の栽培に始まり、初期の型態として中世末に地中海諸島に起り、矢内原もサイプラス、シシリー両島の砂糖栽培にふれている。<sup>(29)</sup>その後アフリカ大西洋沿岸の諸島カナリー Canaries 諸島(一四八〇年に始まる)マデイラ Madeiras 諸島(一四二〇年)およびサン・トーマ São Thome 島(一四八〇年)に蔗栽農業が移動した。<sup>(30)</sup>矢内原は他にアングレス諸島にも及んだとしている。特にサン・トーマ島が栄えていた。<sup>(31)</sup>地中海諸島の糖業は一六世紀中葉に絶滅した。<sup>(32)</sup>古典的な甘蔗栽植業はアメリカ発見後漸次西に移動し、矢内原によると、一五世紀末(一四九二年)にセント・トーマス島 St. Thomas (大アンチル列島の東端)に蔗園が開かれて、<sup>(33)</sup>大西洋アフリカ沿岸島嶼の蔗園に必要であった「人工灌漑の必要もなかった」<sup>(34)</sup>西インド諸島に蔗園は伝播し、黒人奴隸を移住せしめて労働力を確保した。<sup>(35)</sup>資本はもちろぬ商人資本であり、特にポルトガルではリスボンの商業銀行の資本が参加している。<sup>(36)</sup>西インド諸島とともに始まったブラジル海岸地帯(特にペルナンブコ Pernambuco が中心)<sup>(37)</sup>の蔗園は十八世紀の初め頃絶滅したので、「砂糖生産は長らく島独自の産業となり、多くの熱帯島嶼は一七世紀以降の驚くべき繁栄をこれに負うている」<sup>(38)</sup>。他の熱帯作物であるタバコ、ココア、コーヒー、バナナなかならず棉花は十九世紀以降に始めて重要な世界商品になるとともに、その主産地は島から大陸部にうつる。世界商品の交流からみると、前代の南アジア諸島中心の香料時代に変って、八世紀はまさに「砂糖時代」であり、しかも、その主産地は、ヴァイベルによっても、島はその自然条件から「島嶼は栽植業に偏して運命づけられている」<sup>(40)</sup>が故に、また十八世紀は、まさに「島嶼時代」である。キューバ島<sup>(41)</sup>や南アジア

の諸島、特にセイロン島、ジャワ島、台湾島などの蔗園開発は独占段階に入ってから本格化するから、西インド諸島が糖業の独占的地位を占めなかつて「ハイチの経済はひとり砂糖に依存し」<sup>(43)</sup>、「十八世紀における主たる栽植地域として予想外の繁栄を示した」<sup>(44)</sup>。

奴隷諸島 さきにふれたように、早くからアフリカ沿岸の島々に蔗園を開いたヨーロッパの商業資本は、アフリカ大陸の沿岸は「適当な港が全く欠けていた」<sup>(45)</sup>ために内陸進出がおくれた。そして、沿岸の島々は、「近づきやすく、かつ衛生的であり、防禦にも容易であり」<sup>(22)</sup>、内陸進出の根拠地として、また大陸最大の商品であった奴隷その他物資の集散地となった。すなわちリウのいう「島市」が多

アフリカ沿岸の島市



くの沿岸島嶼に開かれた。

例えばノシイベ Noxy-Bé島 (一八四〇年) 或はセントマリー Saint-Marie 島はマダガスカル島征服の第一段階<sup>(46)</sup>をなし、島市として、アフリカ西海岸のサンルイ Sait-Louis 島、ゴレー Goriee 島、トンボ Tombo 島、ラゴス島 Lagos、サン・トーム島、東海岸のマッサワ Massawa 島、モンバサ島 Mombasa 島、ザンジバル島など、その例は極めて多い。ことに、モンバサ島は、十六、七世紀にポルトガルの島市として、またザンジバルはサラセンの時代からの貿易港として<sup>(47)</sup>

栄え、「数世紀の間、世界最大の貿易地の一つであった」<sup>(48)</sup>。そこに集積した富と位置から諸国の争奪的となり、サラセン、ポルトガル、トルコの領有から独立ついでイギリスの領有に変わってきた<sup>(49)</sup>。しかしこれらの島市は、アフリカ大陸沿岸への植民の進出や、奴隸廃止、或はスエズ運河の開通などから、昔日の繁栄を失ったものが多い。その典型的なものは、セネガル河口のサンルイ島<sup>(49)</sup>、西海岸のゴレー島<sup>(50)</sup>、さきのザンジバル島等である。一方では、トンボ島<sup>(52)</sup>、ラゴス島<sup>(53)</sup>、マツサワ島<sup>(54)</sup>やモンバサ島のように今日なお繁栄をつづけているものもある。アジアのシンガポールや、ホンコンもまた内陸進出の基地として建設された島市の、なお繁栄をつづけている例である。すなわち、かかる島市はアフリカ沿岸に限ったわけではなく、古くには地中海東海岸に近いチレ Tyre 島があり、現在でも、<sup>(54)</sup>内陸の未開発なニューギニア南海岸のアルAru諸島、モルツカ群島中のタルナテ Ternate 島、アンボイナ Amboinab 島<sup>(57)</sup>、バンダ Banda 島等もこの島市の例に入ろう。

#### 香料群島

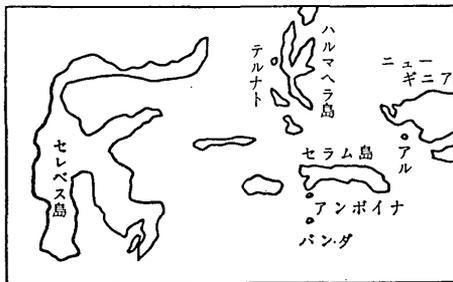
南アジアの熱帯島嶼では早くから香料、手工業品の輸出が行われていた。<sup>(58)</sup>中世既にヒンズー・ジャワ、中国、インド、サラセン、日本商人の活動の舞台であり、一五世紀に入ると、マレー半島のマラッカ Malacca はポルトガルの基地であった。そして、マジャパイト王国の衰退に乗じて、ジャワ沿岸諸都市が都市国家を形成した時期があった。<sup>(60)</sup>当時、東都のジャラタン Djaram は香料および塩の大貿易港であり、パスルアン Pasorean は香料、綿布を輸出し、パナルカン Panaroekan は奴隸貿易港として著名であった。<sup>(61)</sup>

西部ジャワのバンタム Banten は、ポルトガル人のマラツカ海峡支配から急速に発展し、一六世紀末には、ジャワ最大の仲継貿易港として各人があつまり、「あたかも人種博物館の観があった」<sup>(62)</sup>。そこにもたされらた商品は、単に島嶼地域からばかりでなく、全世界に及んだ。<sup>(63)</sup>このバンタムにオランダは一七世紀初頭東インド会社をおいた。

ジャワにおける  
重商主義期の著名港



香料群島の島市



ナト、アンボイナの両島に限って生産を許し、更には、アンボイナ島では、その生産を $\frac{1}{2}$ 以下に減少せしめ、人口も $\frac{1}{2}$ に減少した。<sup>(63)</sup>

十八世紀末(一七九八)にオランダ東インド会社は約二世紀にわたる歴史を閉るが、会社時代に用意されていた強制栽培制度が全ジャワ島に実施され(一八三〇年)、東インドの輸出貿易が急増し、単に独占商人ばかりでなく、本国の国庫に巨大な利益をもたらすとともに、植民地に対して一層はげしい収奪を結果した。<sup>(72)</sup>

この制度は全ジャワ島農民の耕地の殆どないし $\frac{1}{2}$ に強制され、主としてコーヒー、甘蔗、藍の三輸出作物に行われ、その結果、オランダは「さしたる資本を投下することなく」輸出作物の生産者となり、しかも生産力の上昇したジャ

オランダ領東インドは一七、八世紀の間「香料貿易の独占を目的とした」東インド会社の収奪がつづき、そこにあるものは植民政策でなく掠奪があるのみであった。<sup>(65)</sup> それでもジャワ島では、香料のみでなく、コーヒー、茶、砂糖などの輸出作物が増加し、会社と耕作者の間に土着権力機構が介在して輸出作物の強制栽培方式が取られる地域が多かった。<sup>(66)</sup> しかし、例えば従来モルッカ群島中自由に栽培されていた香料を会社は各地域の土侯と契約して会社以外と一切の取引を禁じ、更には生産制限のために、タル

オランダ領東インド貿易

ジャワ島における強制栽培作物別表

(単位1万フロリン)

(1846)

年代	輸出	輸入
1825	1,602	1,244
1830	1,275	1,504
35	3,216	1,555
40	7,397	2,643
45	6,446	2,652
50	5,732	2,404
55	7,876	3,206
60	9,915	4,417
65	10,138	4,028
70	10,776	4,446

作物	労働義務家族	%
コーヒー	409,773	51.4
砂糖	154,786	19.4
藍	168,720	21.2
タバコ	29,493	3.7
香料	24,168	3.1
その他	8,949	1.2

W. K. G. : Grundlagen und Entwicklungsrichtung der landwirtschaftlichen Erzeugung in Niederländische-Indien. (1939.) S.98

J. S. Furnival : Netherland India (1939) pp.104~5 (1825)、pp.129~130 (1830~45)、p.171 (1850~70)

ワ島の人口は、この期間に約二倍の増加を示した。<sup>(74)</sup>  
要するに南アジアの島々に対する直接の資本投下による開発は主としてスエズ運河開通以降の世界経済が独占段階に入ってからであり、それまでのこの地域は重商主義的な商人資本および本國庫庫の独占による収奪にまかされた時期が<sup>(75)</sup>つづいた。台湾もこの例外ではない。

かくして、十八世紀は、商業資本の植民地支配が大陸沿岸の島嶼と熱帯の島々を中心に行われ、西インド諸島の甘蔗生産と輸出、アフリカ沿岸島嶼の<sup>(76)</sup>奴隷貿易および南アジア諸島の香料、手工業品などの貿易の独占が、資本主義期に入る前代における資本積蓄の源泉としての役割を果し、まさに「島嶼時代」であった。そのことは主に島のもっている自然条件に起因していた。当然かかる時期には、「孤島」という考えはあっても、本土に対する「離島」という考え方はあり得なかったであろう。

日本の島嶼時代

主要島嶼の米穀自給度

	島名	生産	消費	自給度	摘要
瀬戸内	豊町	334	1,647	20.3	三角島、大崎下島一部 豊島、齊島、大崎下島一部 田島、横島
	豊浜村	218	3,153	6.9	
	内海町	773	1,374	56.2	
	百島	550	2,170	25.4	
鹿児島	甕島	1,658	2,191	75.6	
	種子島	14,466	11,443	126.2	
	南西諸島	247	700	35.3	
新潟島根	佐渡島	48,490	35,296	137.3	
	隠岐島	4,388	6,237	70.5	
長崎	平戸	9,360	7,136	132.8	
	生月	1,729	2,622	66.0	
	五島列島	17,163	32,156	53.4	
	対馬	5,076	14,400	35.3	
	壱岐	9,520	6,846	139.2	

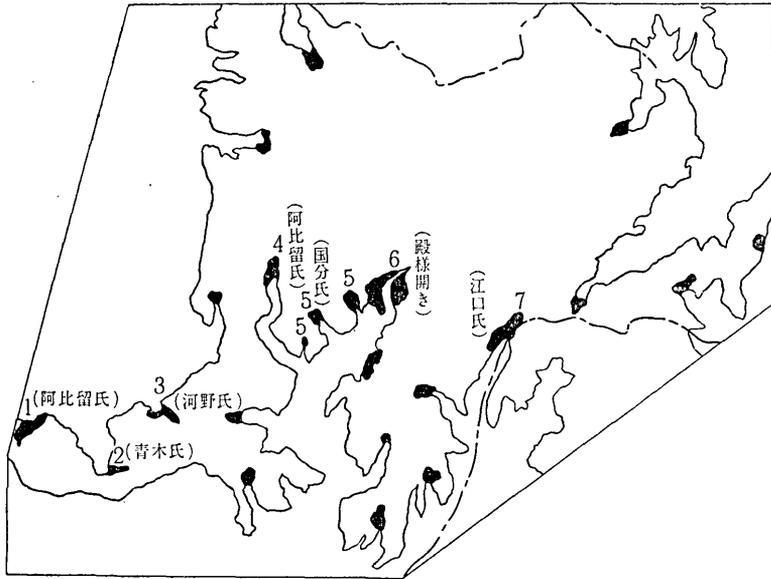
経営と経済

離島振興計画作成基礎調査書（昭和37年）各関係島嶼編による。

沿岸寄港島 鎖国以降対朝鮮貿易を独占してきた対馬島の厳原港のような国際貿易港をはじめ、特に藩政中期以降発達した沿岸航路にそう寄港島、或は特に藩政後期に栄えた西海捕鯨基地の島々など広く他地域と交流した港市、漁業基地は多いが、それらの島々でも鄉村——たとえば対馬のそれの如く——は多く閉鎖社会を形成していたものと考えられる。単に島ばかりでなく、藩政期は城下町、港町などの特定の地域を除いては一般に自給社会であり、従って孤立社会であった。しかし、多くの島々は、今日でもそうであるが、ことに主穀の自給が不可能であり、そのために、それらの島々には早くから海を介して他地域との交流があったと思われる。例えば対馬のような大きい島でも米の自給は不可能で、既に「魏志倭人伝」において、対馬の交易の主目的が米をうることにあったことが指摘され、またその後の対朝鮮貿易の主目的もそこにあった。<sup>(78)</sup>藩政の中頃、米は全消費量の約半

対馬豊玉村の干拓田

離島の商品・資本(一)島嶼時代



この図は豊玉村役場からの聴き取りによって作ったもの。、阿比留氏の干拓は中世に行われ、江口氏の干拓方式に朝鮮方式が取られている由である。対馬水田の70%は干拓田であるといわれている。

対馬の耕地  
(1810—文化10年)

八郷計	4,442.3石
島方	62.9%
木庭方	17.2
田方	14.8
茶園方	4.9
椿森方	0.2
計	100.0

有賀・永島：「対馬封建制度の諸問題」より作成

数近くが不足しており、<sup>(79)</sup> 其のために、対馬では本土より少くとも八〇年早く、山林が木庭耕地として「高入れ」<sup>(80)</sup>され、一八一〇年には対馬全耕地の一七%は木庭耕地であった。海岸の磯場も、農業の肥料源として主として利用されてきた。一方自給度を高めるために、さかんに干拓新田が開かれ、<sup>(82)</sup>これが郷村人口の不断的増加をまねいている。<sup>(77)</sup>干拓新田には、藩自身の手によるもの(今日でもオヒラキとよばれている)と有力給人(在郷武士)の開いたものがある。<sup>(82)</sup>

また瀬戸内海の島々は、藩政後期から異常な人口増加を示した地域であるが、不足した主穀が甘藷の栽培によっておぎなわれたのがその大きい理由であり、また官本によると、瀬戸内の島々から本土農村への出稼ぎの目的は主として米を得ることにあった。<sup>(83)</sup>

(註) もっとも今日の西インド諸島にみられる主食の自給不可能な現象は、耕種農業にとつては劣悪な自然条件による対馬と同一に談じるべきではなく、白人資本の植民地支配の結果したものである。<sup>(84)</sup>

要するに、日本の沿岸島嶼は本土の農山村と異って、その自然条件の故にかえて孤立的であり得ないかなりの例が多かったと考えるべきである。

中世に入って、瀬戸内海の水運はかなり開け、「内海島嶼民の異常な信仰をうけていた」<sup>(85)</sup> 敵島(広島県)には、中世の末頃、既に門前町が開かれ、各地の商人による取引が行われており、「商人は、宿屋業、港湾荷役、倉庫業を営むに至り、広範な取引が成立して、裕福なる町人階級を形成していた」<sup>(86)</sup>。ほかに、瀬戸内島嶼には管帆船時代には官本は、周防上ノ関(山口県直島)、由良、岩屋(以上淡路島)など二、三の寄港島があることを指摘している。<sup>(87)</sup>

<sup>(88)</sup> 鎖国以降わが国沿岸各地に水運が発達し、ことに正徳(一七一―一七一五)年間以降いよいよ隆盛に向っている。当時の主要航路は、東回り、西回り、江戸上方間の外に西海航路があったが、これ以外にも各地の地方沿岸航路があった。<sup>(89)</sup> 地方航路で特に重要なものは下関、長崎間の航路である。<sup>(90)</sup> これらの航路にそう本土沿岸の港市の外に沿岸の島々に多くの潮まち、風待ちの寄港島が栄えた。そして例えば西回り航路の発達によって隠岐島に享保(一七一六―三五)年間以降中国に輸出する俵物が増加し、また対馬の曲においても同様の現象が起っている。<sup>(91)</sup>

古田は「西回り海運の発達が必ずしも瀬戸内に影響を与えなかった」としているが、瀬戸内の「安芸路乗り」から大阪への最短距離として「沖乗り」コースが栄え内海の島々に新しい多くの寄港島が出現している。例えば芸予叢島の

御手洗町の取扱い商品

(天保10年—1839)

他国より購入			他国へ売払		領内へ藩札にて売払	
商品	数量	買入先	数量	売払先	数量	売払先
米	17,000石	北国、北九州、瀬戸内沿岸	11,200石	土佐、日向、瀬戸内沿岸	5,800石	町内、近辺
酒	3,500丁	大阪、播磨、備前、伊予、その他	2,000丁	諸回船	1,500丁	町内、近辺
ソーメン	1,200箱	灘目、小豆島	500箱	諸回船その他	700箱	町内、島々
砂糖	250丁	肥前、讃岐、大阪	200丁	北国、諸回船	50丁	町内

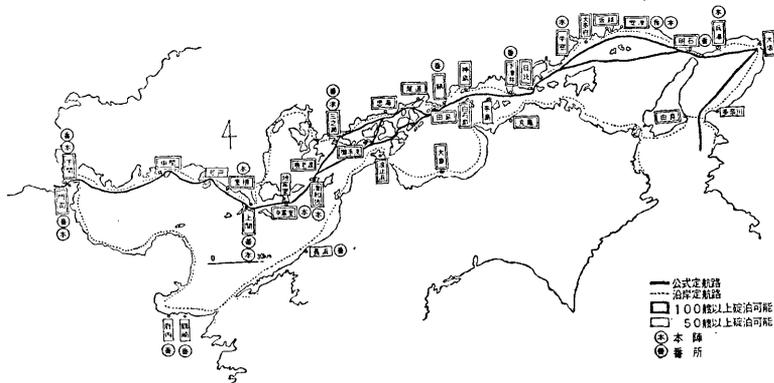
その他、たばこ、干鰯、ローソク、かつをぶし、呉服、藍玉、菓種などの商品取引きあげられている。

(後藤陽一：御手洗港の歴史148頁)

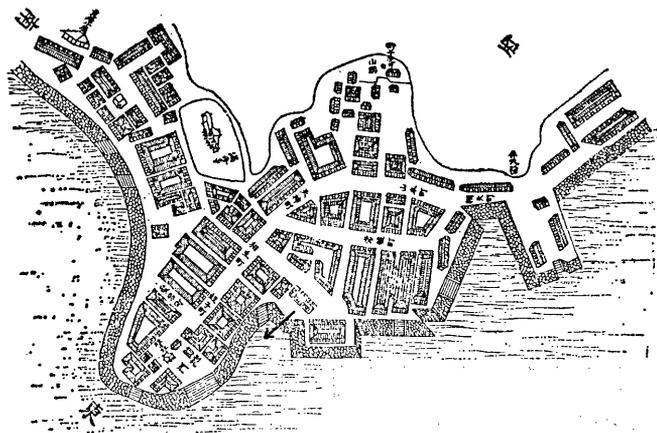
(註) 御手洗の購入相手地域は、北国、肥前、豊前、長門、周防、伊予、備前、備中(以上米)、大阪、播磨、備前、伊予(以上酒)、豊後(たばこ)、灘目、小豆島(ソーメン)、筑前(ローソク)、大阪(菓種)、土佐、日向(かつをぶし)、肥前、大阪、讃岐(砂糖)、大阪、京都(呉服)、阿波(藍玉)に及び、売払先は、土佐、日向、讃岐、大洲、宇和島、上ノ関、北国或は諸回船である。領内へは、町内と近傍の島々に限られていたようである。

西回り航路の発達した時期の内海寄港地

(後藤陽一：瀬戸内御手洗町の歴史90頁所収)



文政年間の御手洗湊



芸藩通誌（安政八年1825）第2巻巻八十六所載。芸藩通誌には「中国第一の湊」とあるが、この後また外港の大調築が行われている。地図中矢印の所は、殆んど原形のまゝ残っている、写真はそれを示した。（昭和41年撮影）



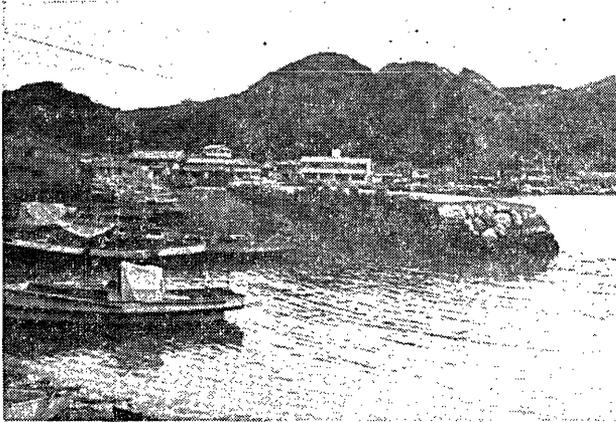
沖乗りコースは山陽筋の沿岸をはなれて、  
 鞆から田島、引削島、岩城島、大崎下島、  
 津和地島、沖家屋島から周防直島に至って  
 いる。<sup>(90)</sup>なかでも、その位置にめぐまれた大  
 崎下島では御手洗港が形成され（寛文六一  
 一六六六年、始めて、人家が建った<sup>(91)</sup>）、沖  
 乗り航路の寄港地として栄え、西国各藩や  
 民間の船宿<sup>(92)</sup>が多くおかれた。当然、単なる  
 寄港地から物資の集散地になり、取扱われ  
 た商品は、藩の「蔵物（貢租の品）」から  
 「納屋物（民間商品）」に及び、北国、西  
 国、四国の米、ことに北国の米が第一で、  
 その大部分が再移出され、或は寄港する航  
 船に売却された。<sup>(93)</sup>藩外取引きの主要相手地  
 域は、北国、大阪、京都、瀬戸内沿岸諸地  
 域、九州におよび、内海の尾ノ道、鞆、兵  
 庫、大阪、下関にならぶ商業地で、御手洗  
 相場が取引きの標準相場であった。<sup>(94)</sup>

港は少くとも明和七（一七七〇）年以前に作られその後修理も行われているが、それらの諸費用は町の「出来銀」から支出され多くは地元負担であった。画期的なものに、既に数百艘の船をつなぐ外内二港をもっていたこの港に、更に文政一一（一八二八）年の調築工事がある。この内外港の築調は、芸州藩の直轄事業として投資され、加えて地元や、鴻池がかなり負担している。これの資金を捻出するために富くじが行われていることは、青木の詳細な研究がある。いわば、本土から、離島への大きい資本投下の一例（一八二八・五から一八二九・五の一ケ年間を要している）であろう。そして、「中国無双の良港」として町民は「永久に繁栄する御手洗港を夢みた」。

単に御手洗ばかりでなく、多くの寄港島に対して、島内外の資金が投ぜられたことは推定に難くなく、例えば、対馬厳原における藩政期の築港も、倉橋島鹿老渡の当時の港も、殆んどそのまま残存している。また「芸州御手洗より備後鞆津迄の間にては当所を汐繁場所と相心得居」（文化一三年子年十月港浚漉願）られていた岩城島（愛媛県）では「宝暦年中（一七五一―一七六三）御上御苦勞を以て波止築方仰けられて」完成していたものが、文化十三年（一八一六）には藩への納米を「当暮米千俵五朱利付にて拜借、元米百俵宛年利米に相添え期間十年」（港浚漉願）年賦で浚漉願が出ている。また単に港灣ばかりでなく大三島（愛媛県）の藩政期の干拓事業をみると、文政元（一八一八）年の口総地先の干拓事業に今治商人の砂田、松山商人加賀屋、藩重役などの出資があり、その他相つぐ新田、塩田開墾が中期以降行われている。この出資者の詳細は不明であるが、多くの本土商人の投資があげられている。

宮本は内海島嶼の集落を七つのタイプに分ち、近世に入って、管帆時代の周防上関（直島）、嚴島、淡路島から、木綿帆船の往来で栄えた寄港島として、周防上ノ関（直島）、地家室（周防大島）、安芸鹿老渡（倉橋島）、蒲刈三ノ瀬、大崎上島蘇、瀬戸田、伊予安居島、岩城島、弓削島、備前白石島、備前大府島等をあげ、また「離島」によると、西廻航路の発達によって宮本のあげた外に蒲刈向浦、伊予津和地島をあげ、日本海側では山形県の飛島、新潟県の粟島、

旧藩時代の厳原港



寛文7 (1667) 年から同12 (1672) 年にわたって構築されたもの。長さ30間巾4間の来崎やらい、長さ70間の中やらい、長16間の東やらいの3つの築港が行われている(対馬島誌501頁)。(昭和40年撮影)

佐渡島(小木港)、島根県の隠岐島、東廻り航路では、宮城県の寒風沢島、上方航路にそう紀州大島、西海航路では佐賀県の加部島、長崎県の平戸島(平戸、田助)、<sup>アツチ</sup>的山大島、樺島(長崎県半島の尖端にあるもの)および天草下島(津崎、牛深)等の風待ち、潮まち港をあげ、<sup>609</sup>現在では多く衰退し、倉橋島鹿老渡、平戸島田助の如きは化石村である。近世に入って、対馬が朝鮮貿易を独占し、月約二五〇隻の貿易船が出入し、米穀の外に、大阪、江戸へ人参、

糸、織物を送り、また「長崎の中国、オランダ船の貨物が、藩の朝鮮方の手を経由して、朝鮮に再移出されていた」<sup>610</sup>。また国内からの対馬の取扱う主要輸出品は大阪銀座で精錬された銅であった。<sup>611</sup>要するに対馬の交易相手地域は広く、長崎、大阪、江戸と朝鮮との財貨を媒介する仲継地でもあり、さきに述べた通りその府中厳原は、一種の自由貿易港的な性格をもっていた。<sup>612</sup>なお博多との関係は、宗氏の出自の関係もあって密接であったが、やはり米の移入を介したものであって、米が直接筑後川尻の大川から送られるようになって博多との関係がよわくなっていく。<sup>613</sup>少くとも、今日みられる博多が対馬にもっているような性格はなかった。小値賀島でも、小田家が俵物を長崎で中国と交易している。<sup>614</sup>干し鰯の好況期には、例えば甕島(鹿児島)

は「肥前、肥後または大阪方面に直接交易するも多く」<sup>(113)</sup>現在の平良漁港も一七世紀末寛政年間に作られた。<sup>(114)</sup>

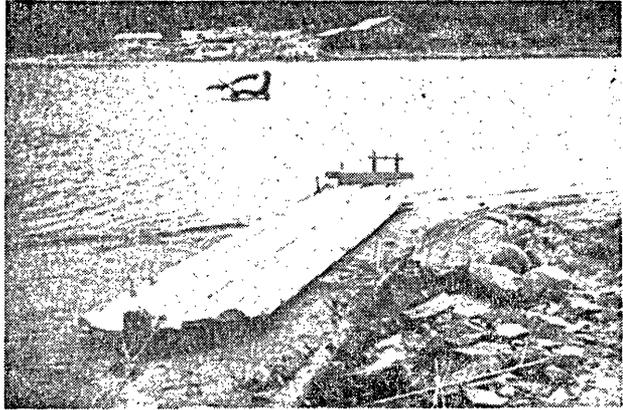
漁業島ことに西海捕鯨島 五島列島を中心とする九州西海の多島海は、古くから瀬戸内多島海と対応する漁民の特殊生活圏を構成していた。<sup>(114)</sup>また前者においては、早くから海人達によって占拠され、主として漁獲によって生活していた。殊に家船漁民の集落とその重要な移動の中心がこの海域に多く見出される。<sup>(115)</sup>

少くとも藩政中期以降になると瀬戸内海域は、水産物の市場条件にめぐまれ、その漁業社会の階層分化は比較的早く、またかなり大規模ないわゆる「大漁業」が成立し、沖合出漁が進められた。<sup>(116)</sup>それらのうちから多くの西海域への移住者を出し、ことに開放的な五島に多く、「五島の近世化は漁業を主軸にして行われた」といわれるが、その漁業発展はこれら外来者の手に担われ進められてきた。<sup>(117)</sup>

対馬では、早くから泉州佐野漁民の鯛網（地曳網が主であるからかなり大規模なものであったと思われる）を中心とする網漁の出漁が多く、しかも島民は寛文檢地後、專業農民化し、自給農業のための磯場の採貝藻業に終るに至って近海の漁獲は全く外来入漁者にまされてきた。<sup>(118)</sup>

早くからの対馬定住の專業漁民は、鐘ヶ崎から移住した曲の蛋人のみであったといえる。<sup>(120)</sup>五島列島の宇久、小値賀、柏（福江島）にも蛋漁業がみられた。<sup>(119)</sup>佐野網は一時享保年間に入漁を禁じられたことがあるが、その鯛地曳網漁や延縄漁は藩政期を通じて対馬において殆んど独占的な漁業権をもっていた。<sup>(121)</sup>一九世紀に入って佐野の網浦が三一に減少しているがなお全島に分布し、ことに明治以降要塞地帯化して不毛の海面とされてきた浅茅湾内が最も多い。<sup>(122)</sup>一八世紀の末になると、長門から鮪、鯛の大敷網が入る。<sup>(122)</sup>明治前期の漁獲物にはなお藩政末期の性格を残している。<sup>(123)</sup>今日対馬の中心的なイカ一本釣漁業は明治以降の外来移住者によって急速な発展をみたものである。藩政期の網入漁者は対

採貝藻いかだ船(佐譲)



(新対馬島誌 539頁)

採貝藻漁業に終わった対馬農民の主要生産手段。九学会の調査した当時右の表のようになお、海藻は兼業農民の重要な現金収入源をなしている。

昭和25年  
唐舟志某家収入  
(1,000円)

総収	245.0
農収入	5.4
ワカメ	37.8
イカ	103.5
その他	98.3

「対馬の自然と文化」  
74頁

対馬の佐野網浦

(文政7—1824—年)

- 西海岸 犬ヶ浦、久原、狩尾、賀佐、田、銘、小網、唐州、廻
- 東海岸 芦ノ浦、横浜、大千尋藻、曾、遣川
- 浅茅湾 貝口、仁位、志佐賀、嵯峨、貝鮎、糸瀬、濃部、大山、島山、竹敷、屋ヶ浦、黒瀬、吹崎、箕形、加志、今里、尾崎

(新対馬島誌542頁)

馬の定住を許されなかったが、一九世紀初頭 国元農民の農閑期における漁業の兼業を免許した<sup>123</sup>ので、罾網や建網のような農閑期の漁業であり、かつ、一村の集団的活動を必要とする漁業はいわゆる村網として共同体経営にうけつがれた。他の鯛、鰯網等の「漁事は漁戸の業」として島外漁民の吸引に努力してきた<sup>124</sup>。つまり対馬では、藩政期において専業漁民の小漁業はむしろ例外的で、共同経営か、外来の網主船元によって経営され、その規模は五島奈良尾の紀州

対馬における主要漁獲物 (貫)

	明治29年	大正12年
ブリ	177,745	32,736
イカ	166,572	4,011,952
コンブ	251,178	—
その他藻	64,490	—
サバ	74,813	157,608
アジ	8,361	104,558
イビ	21,190	166,505
ワビ	23,388	10,452

(対馬島誌286～287頁)

漁業の主流もまたかなり規模の大きい漁業であったといえる。また藩政後期に栄えた薩摩本土側から薩南、琉球諸島への艦船も一艘二〇人位の乗組員があり、ほかに餌取船或は荷取船が一隻ないし二隻あった規模をもっていた。<sup>127)</sup> 要するに少くとも藩政後期における漁業は、極く少数の専業漁民や自給農民の採貝藻漁業のような「小漁業」と、かなり大きい規模をもつ共同経営或は船元、網主経営による「大漁業」があり、そのうち、後者が支配的漁業であった。<sup>128)</sup> これら大漁業のうち、最も大規模なものは、藩政中期以降紀州、南海、山陰海岸および西海域に栄えた捕鯨業であろう。

一六世紀の後半から一七世紀初頭にかけて、捕鯨業は三河、尾張、紀州、土佐、九州西海等の西南日本の沿岸海域で行われていたが、専ら突取法であった。<sup>129)</sup> 突取法の捕鯨規模は、後の網取法と比較すると小規模なもので、主に七、

からの罾網にみられる「一組三〇人ほどの従事者を必要とし」ていた点からみると、かなり規模の大きい漁業が主体であった。五島についてみても、古い共同網で例えば上五島の在郷武士の知行の一部となっていた網代(加徳という)では、一人前網が一帖三〇〇尋あり、網引船三艘を必要とした(網子は浜万百姓<sup>130)</sup>があたった)かなり規模の大きいものであった。<sup>131)</sup> 紀州からの罾網にしてもさきにもふれた通りの規模を必要とし、捕鯨業はもちろんのこと、一九世紀に伝わって、各地に普及した大敷網にしても、古い共同網より大規模なものであった。城下の小市場を対象にした零細な一本釣漁業もわずかにみられるが、五島

18、9世紀における西海主要捕鯨基地

	1) 1773 (安永二年)	2) 1796 (寛政八年)	3) 1808 (文化五年)	4) 1896 (明治29年)
壹岐	前目 勝本	同左	前目 勝本※印通 寺※棚江	箱崎
北松	的山大島 鱈浦 生月島	的山大島 鱈浦 江島 平島 平戸 島津吉 宇久島 小値賀 生月	的山大島 生月島 小値賀 鱈浦 江 島 平島 宇久島 平戸島津吉	生月島 平島 平 戸島植松 崎戸島
五島	柏 有川 魚目 黒瀬 板部大島 浮島	柏 黄島 有川 魚目 早瀬 丹奈 太田 西波	※柏 有川 魚目 板部大島	有川
対馬	鱈浦 廻	鱈浦 廻 伊奈 吉野	※鱈浦※廻	
筑前	掲目大島 於呂之 島	同左	※掲目大島	
唐津		小川島 馬渡島	※小川島 馬渡島 ※呼子※名護屋 ※加部島 (壁島)	小川島

経営と経済

- 註 1) は安永2年木崎悠行の小川島鯨絵巻。  
 2) は寛政8年頃の「小川島の生月仁左衛門捕鯨絵巻」によった福本和夫：捕鯨史話(95、96頁)から転載。  
 3) 文化5年の鯨史稿からのもの(小葉田：西海捕鯨業について、および大日本水産会：捕鯨志)。※印は両者何れかの書物にのったもの。「捕鯨志」では、鯨史稿所載のものでも、明浦或は不時の来鯨を捕えていたものは略している。  
 4) 大日本水産会：捕鯨志(明治29年)125~128頁から引用。

益富組捕鯨頭数

享保10年(1725)~元文5年(1741)	217頭
寛保元年(1741)~弘化元年(1844)	21,200ヶ
弘化2年(1845)~万延2年(1861)	339ヶ
明治2年(1869)~明治6年(1873)	44ヶ

小葉田淳：西海捕鯨業について(平戸學術調査報告一昭和26年)

八艘の船団からなっていた。それでも紀州から西海に出漁したものは、十二、三艘から二〇艘とかなり大型になっていた。<sup>130</sup>

異説が多いが、約一世紀間の突取法時代を経て、九州或は紀州から起った網取法が一八世紀初頭にはかなり普遍化し、規模も大型化した。そして隆替をくりかえしながら、当時の最大のマニユ企業として藩政末期まで存続したが、二〇世紀初頭には、繁栄を極めた西海の島々では、生月、有川（五島列島中通島）と小川島（佐賀県）が残るのみとなった。網取法時代の捕鯨基地を文献で見ると右の通りである。突取法時代の西海捕鯨について小葉田は平戸吉村組の活躍について述べ、それによると、冬浦は壱岐島西北海が中心漁場で、春浦はほかに、五島（平島、江島何れも大村藩）生月、平戸島津吉にもうつつた。<sup>130</sup> 羽原によると、壱岐が当時の西海捕鯨の中心で、主として島外資本による共同鯨組が夷浦に基地をおいていた。<sup>131</sup> 五島の有川、魚目の捕鯨業も紀州人によって創始され、<sup>134</sup> また対馬の捕鯨突組も島外資本によって開かれた。<sup>132</sup>

網取法時代に入ると、壱岐の永取、倉光、土肥、生月の益富、五島の小田、江口、山田、大村藩の深沢、対馬の亀谷の諸鯨組が西海海域に栄え、ことに生月の益富組は最大の規模で、壱岐の前目（冬二組、春一組）、勝本（冬二組、春一組）生月の御崎（冬春一組）、江島（春一組、前目よりうつる）板部大島（春一組、勝本よりうつる）の五組の基地があり、そのうち壱岐の四組が最も大規模であった。<sup>133</sup> 弘化二（一八四五）年以降縮少して、生月、前目、板部の三組となり、明治に入って生月の御崎組のみとなったようである。その間約一五〇年（享保九―一七二四―年創始）<sup>133</sup> の間に捕鯨頭数二一、八〇〇頭をこえている。益富につぐものは土肥組で、寛政一一（一七九九）年の記録では勝本、小値賀、平戸津吉に五組をもっている。

五島では有川、魚目、小値賀のほかに、宇久、丹奈（今日の大洋漁業の納屋のある荒川附近）、黄島に深沢組の基地

寛政11年（1799）西海捕鯨地状況

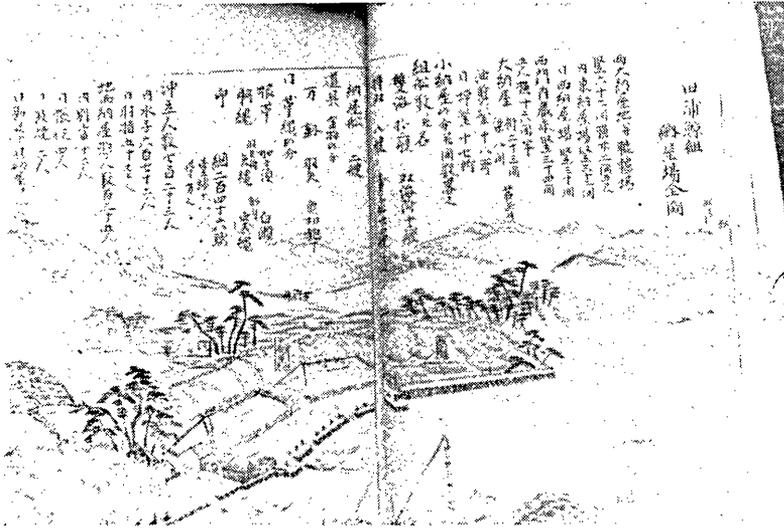
漁場	経営者	漁期	網船	引船勢子船	持双船	
老岐 対馬	勝本	土肥市兵エ	冬春	1隻10人乗り 12隻	引船10隻 勢子船22隻 共に13人乗り	8隻 13人乗り
	前目	益富又左エ門	冬春	〃		〃
	印通寺	〃	春	上の半分	上の半分	上の半分
	廻	土肥市兵エ	冬春	〃	〃	〃
	伊奈	〃	春	〃	〃	〃
	生月島	益富又左エ門	冬春	〃	〃	〃
	的山大島	〃	冬	〃	〃	〃
	小値賀島	土肥市兵エ	〃	〃	〃	〃
	平戸島津吉	〃	春	〃	〃	〃
	五島大村領					
平島	益富又左エ門	春	〃	〃	〃	
榎島	岡田勇右エ門	〃	〃	〃	〃	
蠣ノ浦	〃	〃	〃	〃	〃	
五島領						
字久島	〃	冬	〃	〃	〃	
有川魚目	湯川源次右エ門	冬春	1隻10人乗り	引船10隻勢子船22隻 共に13人乗り	8隻13人乗り	
	宮崎喜兵エ	〃	12隻			
柏浦	生島仁左エ門	冬	上の半分	上の半分	上の半分	
黄島	〃	春	〃	〃	〃	
唐津領						
小川島	中尾仁十郎	冬春	〃	〃	〃	

経営と経済

土佐浮津組大津義三郎「九州鯨組左之次第」（寛政11年）（土佐室戸浮津組捕鯨史料7一13頁）一土佐捕鯨史（上巻）186～187頁より転載。

鯨組納屋場（一岐名勝図誌）

離島の商品・資本移動(一)島嶼時代



田浦（勝本浦のとなり）の納屋場全景（一岐名勝図誌巻之二三可須村勝本浦編一文久元（1861）年一吉野靱千代編＝宅岐郷土館所蔵）納屋場の構造、大納屋、小納屋轆轤場等の分布が非常に明かに出ている。なお鯨組の人員構成は次のページにわたって示されている（昭和39年撮影）

両取法の捕鯨業規模比較

	寛文2年(1662)突取期1)	文久元年(1861)網取期2)
納屋規模	東納屋 13間 4間 西納屋 10.5間 4間	堅(タテ)32間 } 納屋地并轆 30間 } 轆場堅62間 } 横22間5尺
船舶、労働力	鯨船 17隻 226人 本船 2隻 9人 納屋のもの 60人 19隻 295人	網船網船付 24隻 } 持双(モツツウ) 8 } 723人 責子船 24 } 納屋船 2 } 納屋のもの 135人 58隻 858人

1) 小葉田淳：前掲論文 2) 一岐名勝図誌（文久元年）

がおかれ、対馬では天保（一八三〇—一八四三）年間に、地元の亀谷組が冬浦を芦浦に春浦を廻、茂江に開いている。<sup>143</sup>大村領内の捕鯨業は深沢系の活躍のはなばなしいわりに網代は明瞭でなく、羽原は「多くの地付浦または島々の各所に見出される」としているが、主なものは崎戸島、松島（何れも現在の炭鉱島）と江島に関する記事があり、何れも少規模でかつ藩外の資本が入っている。<sup>144</sup>

突取時代の経営規模については小葉田にくわしいが、<sup>139</sup>網時代で最も大型といわれた壱岐勝本について、「壱岐名勝図誌卷三二可須村勝本浦」篇（文久元—一八六一一年）と約二世紀以前の突組の資料でみると船舶数、従事者数ともに約三倍に増加し、納屋も大型化してきている。

この労働力は、小川島ではもと無人島であったのが、紀州から移住者を迎え、<sup>143</sup>五島でも地元或は瀬戸内から多くの労働力をうけ、<sup>147</sup>また生月で興味あるのは網技術によって田島からの、季節出稼者を迎えていることが明示され、<sup>144</sup>河野の推論をうらがきしている。<sup>143</sup>このように地元ばかりでなく多くの島外移住労働力をうけ入れていた。

さて以上述べ来たように、藩政後期の中心的漁業が「大漁業」であるためには当然、市場が単に地方市場ばかりでなく、それに照応する大市場の存在が前提でなければならぬ。捕鯨業生産物についてみると、大阪市場との関係から突組時代の土佐では鯨肉の生産が主であり得たが、<sup>145</sup>西海捕鯨の目的は主として鯨油の生産にあった。<sup>130</sup>当時鯨油はなお菜種油、綿実油の補助として大阪、江戸に市場があったので、<sup>147</sup>当然西海鯨組は主として大阪市場をもっていたと考えられる。小葉田によれば、既に突組時代に吉村組（平戸）が捕鯨の本船二隻を上方へ鯨油販売や捕鯨道具の購入のため往来せしめている。<sup>130</sup>紀州と平戸とを六日半で往還する船舶があった。

中期以降、水稻の害虫駆除に鯨油の効果がみとめられ、鯨油の利用が北九州にはじまり、<sup>143</sup>幕府の奨励（天明八一—

七八八年)もあって鯨油は「文政(一八一六—一八二九)年間に至れば、九州、四国、中国地方に広く利用されるに至り」<sup>(149)</sup> 宍岐郷土史によれば、益富五代の時に点燈用、害虫駆除用に精製された鯨油を単に地元市場の平戸領ばかりでなく、筑前、肥後にも販路を拡張しており、また土肥が直接大阪と鯨油取引をしていたといわれ、今や「鯨油は燈用のみならず農業上不可欠のものとなった」<sup>(151)</sup>。藩政末期には、薩摩藩は、その商品作物のために鯨骨粉を広く買い求めている<sup>(152)</sup>。他の大漁業生産物市場をみても、藩政中期以降、大阪をはじめ各地に商品農作物の生産が発達するに至り、魚肥とくに干鰯の需要は大阪を中心に増大している。対馬に出漁する佐野網の干鰯は、厳原の船問屋の佐野屋が、輸送船二〇—三〇石船(佐野船)で独占的に大阪に送り、<sup>(153)</sup> 帰り荷商品は主に米(五、四、五、五〇〇俵)のほか、塩、紙、綿、苧、タバコである。佐野屋にはほかに江戸から直接二五〇—三〇〇石の船が四、五艘も来ている<sup>(154)</sup>。延宝九—一六八一一年の記録ではほかに船問屋が四軒あり、大体年中五六百艘の船が往来している<sup>(155)</sup>。十八世紀末頃対馬に入った大敷網の鰯市場についても、寒鰯を一日も早く大阪に送る(師走溝)ために、しのぎがけずられている<sup>(156)</sup>。また宮本は本土市場の増大とともに、鯛、鰯などの一本釣漁業が五島列島西側を根拠地として、瀬戸内、石見地方から出漁していることを指摘している<sup>(157)</sup>。

対馬農民のような自給農のための採貝藻漁業に止まっているのは別として、本来漁業生産は商品生産である。従って漁村社会や農漁兼業社会には、当然孤立性は弱いはずである<sup>(158)</sup>。

しかしながら、例えば対馬の佐野網はその生産ばかりでなく、流通機構を府中厳原の特権商人である佐野屋に完全に掌握されているし、これらの商人は藩の御用商人であることが多い。単に佐野網ばかりでなく、対馬の商業活動は、府中の「六十人格」<sup>(159)</sup>をもった特別の身分の商人群の殆んど独占であった。島外入漁者にその漁業生産をゆだねていた

対馬藩では「官ヨリハ有力実直ノ商人へ資金ヲ貸与シ、他国人ヲ雇入稼漁セシメ……」（旧藩時漁政調書<sup>158</sup>）とあり、一般に「明治前期までの漁業生産は……小経営と同様、大漁業もまた商人資本の制約下にあり、漁業生産の実質的支配者、剰余労働の収取者は商人資本であった」<sup>159</sup>点から考えると、漁村社会は、丁度商業農業の発達した農村の流通機構を藩、或はその御用商人に支配されていたのと同様に市場から遮断されており、その点では漁村社会もまた孤立的社会であったとみるのが妥当であろう。もちろん、対馬にみられる採介藻漁業や、或は村網でも単に自村内の肥料をうる自給農業のための漁業生産の社会も同様である。

捕鯨業のような大企業でも、規模の小さかった土佐では、従来直接経営していた商業資本が一九世紀に入ると、分離、専門化し、「捕鯨業が漸く商業資本の手によって左右される」に至るが、西海の大規模企業になると、むしろ、益富、土肥のように長く問屋をかね、また対馬の亀谷卯左エ門は十九世紀に入って「六十人格」を与えられている。<sup>160</sup>これらの捕鯨資本は、例えば壱岐の土肥家、<sup>161</sup>或は小値賀の小田家のように、<sup>162</sup>新田開発にかなりの投資を行っている記録はあるが、近代資本制生産の担い手ではあり得ず、他の「大漁業」とともに明治に入って急速に衰退し、わが国島嶼時代に華々しい色彩をそえたにすぎなかった。

しかし、特に捕鯨業が藩財政に大きく貢献したことは多くの資料で認められるところであり、例えば「前目勝本鯨組永統鑑」（安政七年—一八六〇—写本壱岐永取家所蔵）の「御運上銀御定書の事」にくわしいが、従って、これが「保護ノ術殆ト至ラザルナク」<sup>164</sup>例えば長州藩の如きは「川尻浦捕鯨業者ノタメニ特ニソノ湾口ニ巨額ノ費用ト五ヶ年ノ時日ヲ費シ延長百間巾六間高水面ヲ出ズル四間ノ堅牢ナ波止ヲ築造スル」<sup>164</sup>等の資本投下が行われている等、さきの新田開発とあわせて、藩政後期の捕鯨業は地域の開発にかなりの役割を果たしてきた。

以上の考察で明かなように、「島嶼時代」は、実は、重商主義段階の歴史的産物であった。そして、わが国においても、明治に入って幕藩体制が崩壊して統一政権が形成されるが、大体明治二〇（一八八七）年頃までを重商主義段階とすることが出来るから、右の結論はわが国においても妥当するものと思われる。

然らば、産業資本体制の確立する十九世紀初頭（わが国では一九世紀末）以降、従来栄光の時代を送ってきた島嶼はいかに変貌するであろうか。

△本研究に昭和四一年度文部省科学研究費（藪内芳彦教授の研究協力者として）を使用させて頂いた。▽

（註）

(1) E. Aubert de la Rue : L'homme et les îles. 1935. 山口貞夫訳：島と人、九〇～九二頁。

(2) E. Aubert de la Rue : *ibid.* 訳本二二〇頁。これらの島々は、ポリネシア人が最後に移住した地域（同訳本四七頁）であつて、こゝは、それ以後、殆んど人種の混血がなく、純粹なまゝで保存されている（同訳本五六頁）。ワリスでは四、五〇〇人、フツナでは一、五〇〇人のポリネシア人が居住し、是等の島では、人口は一〇〇年前と殆んど変化がない（同訳本一三八頁）。フツナ島は、かつて捕鯨基地であつた（同訳本一八四頁）。

(3) E. Aubert de la Rue : *ibid.* 訳本九二頁。

(4) 世界経済時代の始まる時期をいつにするかはかなり問題があるが、Jürgen Kuczynski : Studien zur Geschichte der Weltwirtschaft (1952)（加藤長雄・二見昭訳：世界経済史—昭和三〇年—）によらば、

第一に世界が全体として統一ある経済秩序で統一され、支配されていること。かゝる統一的な経済秩序は資本主義的経済秩序である。あらゆる国々で、資本主義的生産関係が優位を占めている必要はなく、むしろ資本主義的搾取者は、十九世紀におけるインドのばあいのようにまだ封建的経済が優位を占めているところをふくめ、いたるところで経済を支配し、またこの事実

にもとづいて、余剰生産物の大部分を支配したことが決定的に重要である。

第二に、最大の諸国における重要な諸変化が、他の国々における発展に対して、實際上の影響を与える程度で、各国が経済的に結びつき、かつ相互に依存しあっていること。

第三に、世界における統一的经济秩序と各国の経済の密接な土台の上に、国際的経済生活の特殊な諸要素が発生することが世界経済の特徴であり、これら諸要素のうちで、もっとも重要なものが世界市場と世界市場価格である（以上訳本四―五頁）。つまり、資本主義経済を中心として全世界が統一的经济秩序のなかに組みこまれる過程において、世界経済体制が形成されてきたことになる。

従って、こゝでいう「世界経済期以前」とは、フランスにおけるブルジョア革命以前を指している。「この頃は、イギリスにおいて産業資本主義がすでに唯一の時期をつくり上げた時代であり、またアメリカ合衆国（一七七六年独立）については、すでにその発展の最初の発端期にある産業資本主義国といつてよい時期であり、フランスは第三の重要な経済領域として、産業資本主義的生産方法に移行し、さらに、全ヨーロッパ大陸における封建制度をもつとはなはだしく動揺させていた時期であつた。」（同訳本一三頁）。

- (5) Leo Waibel : Probleme der Land wirtschaftsgeographie. (1933) 伊藤兆司訳：農業地理学の諸問題―昭和一七年。主として、チュウネンの農業立地論と、熱帯栽植農業に関する論文があつめられている。

- (6) Leo Waibel : ebenda 訳本六二頁。

- (7) 都野尚典：対馬の財政と金融―対馬の経済と社会（昭和四〇年）所収。

- (8) 上野登：地域開発と輸出力（経済評論四一年八月号）

- (9) 拙稿：離島の人口移動（承前）―経営と経済一〇五号。

- (10) 竹内清文：五島列島における生活関係圏について（長崎大学学芸学部紀要社会科学論叢第一二号）

- (11) 例えば、延宝年間（一六七三―一八〇）に彦岐の小田、土肥の手によって、対馬に捕鯨業が始まっている。今日、上対馬にその遺跡が残っている（新対馬島誌五五七頁）。また生月の益富組、大村の深沢組の西海の島々における活動などがある。
- (12) 池末美智子（現内田氏）…平戸藩小値賀小田家文書―昭和三九年大崎論苑によると、「小田家が彦岐から小値賀に移住したのは寛文年間（一六六一―一六七二）のことで、鯨組の網元として、毎年冬春に一人または二人と結んで、「下柳田浦前」、「宇久島平前」、「彦岐瀬戸瀬」、「対州鹿見浦」、「平戸津吉前浜」等五島、彦岐、対馬、平戸に捕鯨業を営んでいる。」
- (13) 後くわしく述べる。
- (14) 後藤陽一…瀬戸内御手洗町の歴史（昭和三七年）一四六頁。
- (15) 宮本又次…対馬藩の商業と生産方（九州大学文化史研究所紀要第一号―一九五〇）によると、「対州に入り来る商売物は何によらず運上をとらない定めであった」とある。
- (16) 宮本又次…前掲。
- (17) 対馬の最近における急速なる変貌については筆者はしばしばふれてきた。例えば、対馬林業に関する若干の問題（対馬総合学術調査報告書一九六二） 離島の後進性と対馬の開発（対馬の経済と社会―一九六五）
- (18) 鹿児島県…離島振興一〇年の歩み（昭和三九年）八頁。
- (19) Aubert de la Rüe: *ibid.* (訳本三三七頁)
- (20) 矢内原忠雄…台湾糖業帝国主義（矢内原忠雄全業第二巻）三九二頁によると、「重商主義下の植民地活動をば砂糖時代と名付くも敢て過言ではあるまい」とし、「一七世紀の各国の植民地競争は金銀のほかには嗜好品を自当てにして行われ、その中心は砂糖であった」（同頁）とのべている。

20 その代表的なものは地中海のフランス沿岸にあるイエール島 Hyères 島であり (Aubert de la Rüe: *ibid.*, 一訳本二四〇頁)、今日では別荘島である (同二九四頁)。

21 Friedrich Ratzel: *Anthropogeographie* (1882) I s. 251.

このラッツェルの思想を、リウは援用して、「大陸の前衛をなすこれら小島嶼は、島嶼の故に近づきやすく、植民や防禦に容易で、かつ衛生的であった」(Aubert de la Rüe: *ibid.*, 一訳本二二二―二三三頁)として、早くから島の植民が始められたことを述べている。

22 Aubert de la Rüe: *ibid.*, 一訳本二五一頁、フェニキアの時代から「島市」として著名なものとして、リウは、レバノンのチレ Tyre をあげている (今日は半島化している)。

24 例えば、大西洋のマデイラ諸島、インド洋のレユニオン島、モウリツシヤス島もヨーロッパ人の来住まで無人島であった (リウ: 一訳本六〇―六一頁)。

わが国の小笠原島が一九世紀末まで「無人島」であった。

25 Friedrich Ratzel: *ebenda.* s. 556 (なお拙稿: 離島地理学の方法と対象―長崎大学経済学部六〇周年記念論文集、註 69 参照)

26 古田良一: 日本海運史概説 (昭和三〇年) 六九―七〇頁。

27 小栗田淳: 西海捕鯨業について (京都大学平戸学術調査報告―一九五〇) によると、捕鯨基地は西海の島々の殆んどすべてに及んでゐる。

28 Leo Waibel: *ebenda.* 一訳本四九頁。

29 矢内原忠雄: 帝国主義下の台湾 (矢内原忠雄全集第二卷三九三頁) によると、十字軍の頃にはサイプラス Cyprus 島に蔗園がいと生まれ、砂糖は十字軍貿易の主要商品の一つであった。後シシリー島にも蔗園が開かれた。

(30) Leo Waibel : ebenda. 訳本六二頁。

(31) 矢内原忠雄：前掲三九二頁。

(32) Leo Waibel : ebenda. 訳本六二―六三頁によると、十六世紀中葉には、全土の殆どが開かれ、既に六〇ヶ所の甘蔗植が多数の運河設備、砂糖搾汁機および乾蒸機を備えて経営されていた。」そしてなかには「一五〇ないし、一二、〇〇〇人の黒人奴隷を自己の農場に所有していた栽植企業家があった」(同訳本六七頁)。

(33) 矢内原忠雄：前掲三九二頁。

(34) Leo Waibel : ebenda. 訳本六七頁。

(35) ジャマイカ島の今日の全人口の七七％は黒人であり、ハイチ島でもその住民の大部分は黒人奴隷の子孫である。トリニダード島でも黒人が住民の半数を占めている(有沢広巳、都留重人、小椋広勝：世界経済総論―一九五九―の各関係頁)。

(36) Leo Waibel : ebenda. 訳本六九頁。なお、ドミニカ(ハイチ島)の首都サント・ドミンゴ Santo Domingo は一四九六年に建設された西半球最古の白人植民都市である。

(37) Leo Waibel : ebenda. 訳本二七六頁によると、ヘルナンブゴは、一六三〇年頃には、既に一六六個の製糖工場をもっていた。矢内原は、ブラジルの糖業は、マテイラ島から移され、一五九〇年にはプランテーションは約一〇〇をかせえ、一六〇〇年には砂糖輸出は三、〇〇〇万ポンド(重量)に上り、当時の糖業の中心はブラジルであった(矢内原忠雄：前掲三九二頁)としてゐる。ワイベルは、「ヨーロッパの資本、アジアの作物(甘蔗の原産地は南アジア)、アフリカの労働力、アメリカの気候と土地」によつて、栽植の古典的な創造がなされたとしてゐる(Waibel : ebenda. 訳本六九頁)。

(38) Leo Waibel : ebenda. 訳本二七六頁によると、ブラジルにおいて、オランダとポルトガルとの同地支配をめぐる斗争の結果、この地の蔗園経営者たるユダヤ人がブラジルから追放され、栽植農は絶滅した。

(39) Aubert de la Rüe : ibid. 訳本二一四頁。

- (40) Leo Waibel : ebenda. 訳本三〇五頁。  
 (41) Leo Waibel : ebenda. 訳本三四四、三四八頁によると労働力不足のため、奴隷廃止後の技術的進歩によって、始めてこゝが西インド諸島の糖業の中心地となる。

- (42) 十八世紀にインド洋のモウリツシアス Mauritius 諸島やレニオン Réunion 島などで甘蔗が移植され (Aubert de la Rüe : ibid. 訳本二一五頁)、また、ジャワ島においても一六三〇年頃、甘蔗栽植が行われ (Leo Waibel : ebenda. 訳本七〇頁)、古くには、アラビアの商人の手によって、エジプトを陸路地中海にはこぼれていたし、十七、八世紀において、またオランダ人も、同じ方法を取っていたが、「アメリカの砂糖生産地に故障が生じ、ヨーロッパへの輸出が減じた時に限って、大量にジャワから輸入していた」(同訳本六六頁)ので、南アジアの糖業は、この世紀ではむしろ補助的な役割しか果たしていない。

南アジアに栽植農が栄えるのは、スエズ運河(一八六九)の開通以降である。

- (43) Leo Waibel : ebenda. 訳本二七七頁。  
 (44) Leo Waibel : ebenda. 訳本二七六頁。  
 (45) Leo Waibel : ebenda. 訳本二三三頁。  
 (46) Aubert de la Rüe : ibid. 訳本三三八頁。なおセントマリー島は今日香料の栽培が行われている。(同書二二四頁)。  
 (47) Aubert de la Rüe : ibid. 訳本二五三頁～二五四頁。  
 (48) Aubert de la Rüe : ibid. 訳本二三五頁～二三七頁によると、「アラビア人はザンジバルをアフリカ大陸との交易中心とし」(同書二三五頁)、大航海以降、ヨーロッパとインドとの航路の寄港地となり、暗黒大陸の物資がこゝに集中した。「本島の勢力は近接沿岸に対して非常に大きく、古い諺に「ザンジバルで笛吹けば全アフリカが踊る」とうたわれた」(同書二三五頁)。従って諸国の渴望の的であった。

(5) Aubert de la Rue : *ibid.* 二五三頁。

(6) こゝもまた西部アフリカの大島市であり、特に十七、八世紀は重要な奴隸市であった。各国はその領有をあらそい、十七世紀の初頭オランダ人が占領し、ついで、イギリス、オランダ、フランスの領有が変っている (Aubert de la Rue : *ibid.* 二三八頁)。のち、「対岸ダカル Dakar の繁栄のまゝに徐々にその光輝を失った」 (同書二五三頁)。

(6) ゼンシバルはスエズ運河開鑿と奴隸廃止で一九世紀後半次第に稱落し、ことにモンバサとの競争に破れてその重要性を失った。しかし、さきのゴレー島のように全面的な稱落を示さなかったのは、この島が、島市たる性格を放棄して、丁字栽培を中心とする香料島に変わったからである (Aubert de la Rue : *ibid.* 訳本二二六頁)。

(6) 今日ギニアの唯一の外港コナクリ Conakry が建設され、過去の繁栄を維持してゐる (Aubert de la Rue : *ibid.* 訳本二五三頁)。

(6) ラホス Lagos はオグム河の河口の小島に位置し、ニヂェリア Nigeria の主都であり、その内陸の経済的發展によつて真の重要性を獲得した (同右同頁)。

(6) マッサワはエリトリアの首都であり、依然として紅海における最も活潑な港湾で、今日本土に結ばれている。これはエリトリア、北エチオピアへの主要上陸地で、同地方の大集散地たる地位を失つていなく (Aubert de la Rue : *ibid.* 二五四頁)。

(6) モンバサは十六、七世紀に栄えたポルトガルの島市で、東アフリカ最大の港であった。今も往時の跡をとらめている。この島は大陸と架橋され、内陸に入る鉄道の基点である (Aubert de la Rue : *ibid.* 二五三～二五四頁)。ゼンシバル島と深刻な競争によつて今日の地位を獲得した (同二二六頁)。

(6) チレは紀元前十二世紀末に、フェニキア全土の首都となり (Aubert de la Rue : *ibid.* 訳本一四三頁)、また著名な物資の集散地で、アルメニア、アラビアから隊商の運ぶ産物が殺到した (同書二二三頁)。リウはまた、「ゼンシバルは、フェニキア時代にチレの果した役割を、數世紀にわたつて東アフリカに対して努めてきた」 (同書二三五頁) と述べている。

- (57) Aubert de la Rue : *Ibid.* 訳本二三四頁。
- (58) 東亜経済調査局：蘭領東印度—南洋叢書第一卷四五頁（昭和二年）によると、マルコポーロの時代、既にジャワ貿易は盛んで、中国に対して、香料のほか、金、銀、陶器その他を輸入していた。またインド商品の取扱いも多かった。
- (59) 「十五、六世紀頃にはヒンズー・ジャワ人は船員、船大工、大砲製造者、植民者になるものが多かった。また彼等は全マレー群島のみならず、マラッカ半島やフィリピン群島の貿易を支配していた。彼等が一七世紀になって全く農業者と化したのはバタラム王国とオランダ東インド会社の政策の結果である。」(De Kat Angelino : *Colonial Policy*, 1931. Vol. 1, p. 191.)
- (60) 東亜経済調査局：前掲四七頁。
- (61) 東亜経済調査局：前掲四八—四九頁。
- (62) 東亜経済調査局：前掲五四頁。
- (63) 東亜経済調査局：前掲四九—五〇頁。
- (64) 関 嘉彦：蘭領印度農業政策史（昭和一六年）二〇頁。
- (65) 東インド会社の主な収入は独占貿易による商業利潤の外に、土侯、原住民からの租税がある。この租税は貨幣の他に強制引渡と割当買納があり、かゝる租税から得られた商品の貿易上の利潤、或は直接会社の支配する例えばモルツカ諸島の農民から収奪する物資を独占的に販売する利潤があり、「会社の利潤増加のためには原住民の疲弊も作物の涵濁も全然意に介しなかつた。」(関嘉彦：前掲書二〇—二二頁)。
- (66) 例えば、ジャワの直接支配地の農民に対して、コーヒーを強制的に栽培せしめ、砂糖はオランダ人渡来以前より栽培されていたが、会社は海岸地方に甘蔗を強制的に栽培せしめ、これを中国人の製糖業者に提供せしめていた。一七一〇年にはバタビ

ア地方のみで一三〇の製糖工場があつた(関嘉彦：前掲二一―二二頁)。なおヴァイベルは、一六三〇年頃にはジャワで甘蔗栽培が行われ、中国人が労働者としても、また企業家としても参加していた(Leo Walbeil : ebenda, 訳本七〇頁)としている。

(67) 関 嘉彦：前掲二二頁。

(68) J. S. Furnival : Netherlands India 1939 p. 42. によると、東インド会社統治の間にアンボイナでは、人口は一五万から五万に、丁子は三五〇万ポンドから一〇〇万ポンドに減少した。

(69) 現金租税は、結局農民を高利貸に隷属せしめ、かつ、輸出用作物は、農民に利益をもたらさないから強制的に耕作せざるを得ない。

強制栽培制度は耕地の $\frac{1}{2}$ にコーヒー、甘蔗、藍などの輸出用作物を栽培し、その収穫物を現金租税の代りに納付せしめる。この栽培は土着権力機構の指揮のもとに行ない、政府官吏は監視するに止めるといふのが大体のこの制度の骨子である(関嘉彦：前掲四四―四五頁)。

(70) 東インド会社解散後、オランダ政府はイギリス統治時代に行われた自由貿易政策を排除して、設立されたオランダ商事会社を通して輸出用作物の貿易独占を行った(関嘉彦：前掲四二頁および四五頁)。

(71) 例えば東亜経済調査局：前掲六一頁によると、「いかに原住民の収奪を強行したかは、廃止までの三五年間に四、〇〇〇万ポンドに達する巨額を本国に送った点にも明瞭である」。

(72) 元來この制度は現金地租に代る物納税制であつたが、実際には強制耕地(所有耕地の $\frac{1}{2}$ )に対する物納であり、他の $\frac{1}{2}$ 耕地に対しては金納が強制された(関嘉彦：前掲五一頁)。

また $\frac{1}{2}$ の耕地が実際には $\frac{1}{2}$ 、時には $\frac{1}{2}$ に及んだ(関嘉彦：前掲五〇頁)。

強制栽培制度実施以降、輸出貿易の急増は、まさに典型的な飢餓輸出であり、例えば、甘蔗は水稻と競合し、また藍栽培には

数週間、或は数ヶ月間に亘って米作地よりはなれて労働に従事しなければならなかったため、「米栽培に与えた影響は破壊的であった」(関嘉彦・前掲五一頁)。その結果、強制栽培制度が強行された地方の人口異動が激しく、塩谷によると一八四八年から一八五〇年の間に、ある地方では人口三三・六万人から一二万人にまたある地方では九万人からわずか〇・九万人にまで減少した(塩谷巖三・ジャワの強制栽培制度―新亜細亜、昭和一六年二月号)。

(73) 別技篤彦・東南アジア諸島の居住と開発史(一九六〇)一四六頁。

(74) 一九世紀初頭四〇〇万のジャワ人口が一八四五年には九〇〇万に達した(別技篤彦・前掲一四七頁)。

(75) 台湾は、わが国の領有(一九世紀末)まで、「イギリス、アメリカおよび中国商人の商業資本的搾取」(矢内原忠雄・前掲二九八頁)がつづいた。

(76) 本位田によると「イギリスが一六八〇年から一七八六年の約一〇〇年間にアメリカに送った奴隷は年々二万人を超え、最盛時には一九〇隻の奴隷船が、年々五万人を送った(本位田祥男・イギリス経済史要―昭和一八年―一三三頁)。

奴隷を使用する農場の利益も大きく、砂糖、コーヒーの農場で、一人当たり年々三〇ポンド、棉花畑では二五ポンドといわれる。しかもその生計費を考えると二年にして完全に奴隷価格を償却し得た(同書一三四頁)。

なお奴隷の年間生活費は二五シリングであったとカストロ Castro: *Geography of Hungry 1952*. 国際食糧農業協会訳: 飢えの地理学(一五八頁)は指摘している。

なお、ザイベルによると、セーレルは奴隷貿易の結果、アフリカの失った全人口を四、〇〇〇万人と推定しているとし(Scherer: *Allg. Geschichte des Welthandels*, 1853 II, s. 148.)、その結果、アフリカは労働力不足になやみ、長く栽植農の入らなかつた一原因とみてゐる(Leo Waibel: *ebende*. 訳本二八六頁)。

その結果、例えば十九世紀末から開かれたアフリカの北部ナタールやズールランドの甘蔗栽培にはインド移民が多く送られている(別技篤彦・プランテーション一九六六年―一七頁)。